

日本の小学生の性格特性と防災意識との関連

清水誉子¹⁾ 酒井彰久¹⁾ 小林溪太²⁾ 野原正美³⁾ 佐々木麻未⁴⁾ 増田和哲⁴⁾ 佐藤大介¹⁾

- 1) 福井大学学術研究院医学系部門看護学領域
- 2) 福井大学 教育・人文社会系部門 教員養成領域 生活科学教育講座
- 3) 福井大学大学院医学系研究科附属地域医療高度化教育センター 看護キャリアアップ部門
- 4) 福井大学大学院医学系研究科修士課程災害看護専門看護師コース

要旨

本研究の目的は、小学生の性格特性と防災意識との関連を明らかにすることである。対象者はA県内小学校5・6年生であった。調査内容は性格特性として小学生用5因子性格検査40項目と、防災意識の質問10項目であった。その結果5・6年生124名の調査協力が得られ、未回答者を除外した117名を分析対象とした。児童の性格特性は、協調性と統制性の2項目が基準の平均値よりも得点が高く、他者への思いやりや責任感が強い集団であった。児童の防災意識は、「自然災害は怖いと思いますか？」等の得点が高かった。また統制性は防災意識10項目のうち、9項目で有意な正の相関関係と、重回帰分析の結果、防災意識7項目の影響要因であった。統制性は性格特性5因子の中で最も防災意識に影響を与える特性であることが示された。今後は個人の強みを活用しながら、より広範な防災に対する風土を醸成することが重要である。

キーワード：小学生，防災意識，性格特性

責任著者：清水誉子 〒910-1193 福井県吉田郡永平寺町松岡下合月 23-3 urutaka@u-fukui.ac.jp

Relationship between disaster prevention awareness and personality traits of Japanese elementary school students

SHIMIZU, Takako SAKAI, Akihisa KOBAYASHI, Keita NOHARA, Msami
SASAKI, Asami MASUDA, Kazuaki SATO, Daisuke

- 1) Faculty of Medical Sciences, Division of Nursing, Field of Clinical Nursing, University of Fukui
- 2) Faculty of Education, Humanities and Social Sciences, University of Fukui
- 3) University of Fukui Graduate School of Medicine, Center for Advanced Education in Community Medicine, Division of Nursing Career Development
- 4) Graduate School of Medical Sciences, Master's Program in Nursing, Disaster nursing Certified Nurse Specialist, University of Fukui

Abstract

This study aims to clarify the relationship between elementary school students' personality traits and disaster prevention awareness. The participants were fifth- and sixth-graders at an elementary school. The Content of Evaluation consisted of 40 items of a 5-factor personality test for elementary school students as personality traits, and 10 questions on disaster prevention awareness. In all, 124 fifth- and sixth-grade students participated in the survey, and after excluding non-respondents, 117 students were included in the analysis. Regarding the children's personality traits, their scores on the two items of agreeableness and controllability were higher than the standard average values, indicating that the children had a strong sense of concern and responsibility for others. Regarding children's disaster prevention awareness, the scores for such items as "Do you think natural disasters are scary?" were high. In addition, controllability showed a significant positive correlation with 9 of the 10 disaster prevention awareness items, and multiple regression analysis showed that it was an influencing factor for 7 disaster prevention awareness items. Controllability was shown to be the personality trait that most influenced disaster prevention awareness. In the future, it will be important to foster a broader culture of disaster prevention while leveraging individual strengths.

KeyWords: elementary school students, disaster prevention awareness, personality traits

Corresponding Author: SHIMIZU Takako 23-3 Matsuokashimoaizuki Eiheiji Yoshida Fukui 910-1193
urutaka@u-fukui.ac.jp

I. 緒言

近年は自然災害が毎年発生しており、被害が甚大であるため発災時に迅速で適切な対処が求められる。平成23年に発生した東日本大震災や平成30年7月豪雨では、多くの児童に被害が及んだ。東日本大震災は平日午後の地震発生であったため、多くの児童は学校に在籍しており、教職員の避難誘導により地震による死者は発生することがなかった。しかしその後の津波によって児童が巻き込まれ、命を落とした。また地震発生後、保護者への引き渡し後に津波の被害にあったケースもみられた¹⁾。一方で、沿岸部から近距離の学校であっても、児童生徒だけでなく教職員含め全員が助かった事例も報告されている²⁾。想定外の災害が発生した時に教職員は冷静な判断のもと、避難の判断や状況把握を的確に実施することが求められている。しかし教職員にとっても発災後は、ストレスや恐怖、混乱により冷静な判断ができない場合も想定される。過去の災害から学ぶことは、「なぜ尊い命が守れなかった」という原因究明と、「今後どうしたら良いか」という再発防止が重要であると考えられる。そのため常日頃から各地域で起きうる災害を想定した訓練や準備を十分に行い、他機関との情報共有体制を構築し、災害対策マニュアルの見直しや事業継続計画（以下BCP）の策定が重要となる。

災害発生時に在籍している児童にとっては、学校管理下のもと教職員の指示に従い行動することが前提となる。学校保健安全法第26条では、学校の責務として災害等により児童生徒に生ずる危険を防止することが求められている³⁾。災害による学童期への心身の影響は、発災直後によく現れており⁴⁾、教職員と同様に恐怖心や不安により想定外の行動をとる可能性がある。集団行動が求められる状況の中で児童の予期せぬ行動は、教職員の判断にも影響を及ぼし、命の危険につながるリスクがある。教職員はストレス環境下における児童の行動特性を十分に理解した上で的確な指示と安心感を与えることが重要である。一方で教職員からの指示待ちだけの行動を児童へ促す教育の是非も検討することが必要である。学童期は周囲の他者と遊びや学びを通して日常生活に必要な概念や価値観を確立する。特に思春期前の5・6年生は自分自身の個性を無意識のうちに気づき、社会性を理解する重要な期間

である。石巻市立大川小学校の事故検証報告書内には、避難訓練の内容として子どもが自ら判断・行動する能力の向上を意識し主体的に動くことのできる訓練が重要であることが提言されている⁵⁾。何らかの原因で教職員がいない状況下で災害が発生した場合、児童だけで命を守る避難行動が取れるかどうか、想定外のことを想定した上での教育を推進していくことも今後求められると考える。また、平成30年7月豪雨では子どもの死亡のほとんどが土砂災害によるもの⁶⁾であった。本災害での土砂災害は65%が土砂災害警戒区域内での発生⁷⁾であり、早期の避難が命を守る上で重要であったと言える。

文部科学省は2020年度の学習指導要領の中で「生きる力」を育む防災教育の展開を推進している⁸⁾。防災教育は、学校のみならずそれぞれが暮らす地域の中で知識を備え、災害から自らの命を守り、「生きる力」を涵養し、能動的に防災に対応することのできる人材を育成するために行われるものとの考えを示している。能動的な行動の前提には、知識が関係している。能動的な避難行動につながる避難行動意図の規定要因として、宇田川ら⁹⁾は、避難することで得られる防災効果としての「効果評価」や避難場所にたどり着くことが可能かどうかの「実行可能性」を指摘している。効果評価や実行可能性を検討する際には、自分の居住地に起こりうる災害の種類や程度、避難場所等の知識が重要となる。また、環境配慮行動の分野で村上ら¹⁰⁾は「知識獲得→関心喚起→意図形成→環境配慮行動促進」という基本プロセスがあると述べていることから、知識を獲得し、アクティブラーニングで関心を喚起したり、意図を形成することで行動促進につなげる必要がある。さらに、行動に影響を及ぼす他の要因として性格特性も関連している。性格は、個人の感情、態度、価値観、行動の傾向など、その人の特有の特性や傾向の組み合わせを指している。性格は安定しており、個人の基本的な性格特性が時間とともに変化することは比較的少ないと考えられる。防災行動と性格特性の関連において、成人を対象とした研究では、竹ノ内ら¹¹⁾や原田ら¹²⁾が避難意識や備蓄行動に性格特性が影響していることを明らかにしているが、子どもの防災意識と性格特性の関連を明らかにした研究は見当たらない。

小学生の性格特性における防災意識との関連以外の先行研究¹²⁾の中では、集団の中で級友からの受容との関連性が明らかとなっている。特に社交性がある特性の児童は、他の児童からの受け入れが良好である一方で、他者への攻撃性がある児童は、受け入れが不良である¹³⁾。発災時に他者への攻撃性がある児童が適切な避難行動を取るべきと主張したところで、周りの児童は同調性や正常性バイアスが働き、状況を過小評価して危険に晒される可能性がある。さらに、小学校高学年の時期は、ギャングエイジと呼ばれる付和雷同的な行動が見られる¹⁴⁾ことが特徴で、閉鎖的な仲間集団の中では同調性や正常性バイアスが強く働く危険がある。

そこで小学校高学年を対象に、命を守るための避難行動に影響する性格特性と災害や防災に対する知識や認識との関係性を明らかにすることで、児童の個々の特徴にあった防災教育を展開することができる。よって本研究の目的は、小学校5～6年生の性格特性と災害や防災に関する知識や認識（以下防災意識）との関連を明らかにすることである。本研究によって今後児童の個々の特徴にあった防災教育の充実や発展に寄与できる。

II. 用語の操作的定義

1. 性格特性：個人を特徴づける持続的で一貫した行動様式とする¹⁵⁾。

2. 防災意識：納谷ら¹⁶⁾の定義を参考に、「災害に対して日常的に、自らが被災し得る存在であることや、情動的、物的、社会的備えが必要であることを認識している度合い、また自分や家族、周囲の人の命を守ろうとする程度」とする。

III. 研究目的

小学校5～6年生の性格特性と防災意識との関連を明らかにすることである。

IV. 研究方法

1. 対象者

A 小学校で地震による火災を想定した避難訓練を1年に1度受けている5・6年生とする。

2. 調査期間

令和5年6月

3. 調査内容

1) 性格特性：曾我¹⁷⁾によって作成された小学生用5因子性格検査 (the Five-Factor Personality Inventory for Children, FFPC) 40項目を使用した。協調性、統制性、情緒性、開放性、外向性の5下位項目に分類され、はい、どちらとも言えない、いいえの3段階によるリッカート尺度である。得点が高いほど、5因子のそれぞれの特性が強い傾向を示す。

本尺度は、調査項目が40項目と他の尺度より項目数が少ないため、対象者の負担感を考慮して採用した。

2) 防災意識：保田¹⁸⁾らの研究で用いられた質問紙で、自然災害は怖いと思いますか？自然災害が起こった時に、自分はケガをするかもしれないと思いますか？住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だと思いますか？といった内容の質問10項目である。「全然思わない～かなり思う」の5段階によるリッカート尺度である。得点が高いほど、防災意識に関する認識が高いと判断する。

4. データ収集方法

研究協力の同意を頂いた小学校にて、各学年の担任教諭より作成した自己記入式質問紙の配布を依頼した。児童たちには回答に対して強制力をかけない形で配布をしてもらい、後日担任教諭により回収を行った。

5. 分析方法

各項目の記述統計量を算出し、単純集計を行った。その後 Shapiro-Wilk 検定を行い正規性の確認後、性格特性と防災意識の2変数との相関を Spearman の相関係数を算出した。また防災意識に影響する性格特性を明らかにすることを目的に、防災意識の10項目を従属変数、性格特性の5因子を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。有意水準は全て0.05として分析には SPSS ver28.0 を用いた。

6. 倫理的配慮

本研究は、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認（承認番号：20230014）を得て実施した。研究協力者およびその保護者には、調査・研究の目的・方法や内容等について説明した。また、アンケート結果は記号化して匿名性を保持すること、情報の守秘及び結果は本研究以外の目的には使用はしないこと、公表の範囲、予測される不利益、また研究参加の拒否、研究の協力は、協力者の自由意思であり、辞退により協力者が不利益を被ることはなく、成績等に一切関係のないこと、研究同意の方法、データの保管、質問や疑問への対応方法について明示し研究説明書と口頭で説明した。知り得た情報は研究終了後に破棄し、研究で知り得た個人情報がある場合は守秘を厳守する。本研究では協力者の氏名、生年月日、住所などの個人情報は管理しないため、個人情報が本研究から流出する危険性はない。また、収集したデータについては、安全性を期すためにインターネットに未接続でプライバシーマークを付与されたHDDにて管理を行う。開示すべき利益相反状態はない。

V. 結果

質問紙 124 部を対象者に配布し、124 部回収した。回収率 100%であった。その後回答状況の確認を行い不適切な回答の質問紙を除外した結果、分析対象者は 117 人（5 年生 61 人、6 年生 56 人）であった。

1. 対象者の性格特性及び防災意識

1) 対象者の性格特性（表 1）

協調性、統制性、情緒性、開放性、外向性の各項目の平均点±標準偏差及び各項目の一般標準基準値を示す。基準値の平均点を超えた項目は、協調性、統制性の 2 項目であった。

2) 対象者の防災意識（表 2）

平均得点が 4 点台は 6 項目で、3 点台は 4 項目であった。4 点台の中では「自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある」や「自然災害は怖いと思いますか？」の項目の得点が高かつ

た。一方で 3 点台は、「住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域である」と「自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思いますか？」の項目の得点が低かった。

2. 性格特性と防災意識との関係性

1) 性格特性と防災意識との 2 変数の相関関係（表 3）

性格特性と防災意識との 2 変数との相関変数で、統制性が防災意識 10 項目のうち、9 項目で有意な正の相関関係が認められた。0.7 を超える強い相関はないが、1. 自然災害は怖いと思いますか？ ($r=.416$)、5. 自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある ($r=.339$)、8. 学習内容を家族に伝える ($r=.395$) の項目で相関関係がみられた。統制性の特性が高いほど防災意識が高いことが示された。一方で外向性は、6 項目で有意な負の相関関係が認められた。4. 自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思うか？ ($r=-.204$)、8. 学習内容を家族に伝える ($r=-.247$) の項目などで弱い相関関係がみられた。外向性の特性が高いほど防災意識が低いことが示された。また開放性は、11. 自然災害は怖いと思いますか？ ($r=-.205$) の 1 項目のみ有意な負の相関関係が認められた。それ以外の防災意識とは相関関係が認められなかった。

2) 防災意識に影響を及ぼす性格特性との関係性（表 4）

重回帰分析の結果、1. 自然災害は怖いと思いますか？は統制性 ($\beta=.451$, $p=.000$) と有意な関係性が認められた。その他、防災意識 6 項目と統制性は有意な関係性が認められた。また 4. 自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思うか？は外向性 ($\beta=-.204$, $p=.029$) と、6. 自然災害が起きた時約束事を決めておく家族は安全であるは協調性 ($\beta=0.322$, $p=.000$) と、7. 自然災害が起きた時、家族は安全に避難できるは外向性 ($\beta=-.190$, $p=.041$) と有意な関係性があった。

表1 対象者の性格特性

n=117

項目/基準値	協調性/19.19	統制性/16.69	情緒性/16.90	開放性/16.81	外向性/17.11
平均±SD	19.96±3.77	18.65±3.30	15.54±4.06	16.81±4.14	16.50±3.92

表2 対象者の防災意識

n=117

防災意識 10項目	平均±SD
1.自然災害は怖いと思いますか？	4.45±0.95
2.自然災害が起こった時に自分は怪我をするかもしれない	4.16±1.08
3.住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域である	3.25±1.14
4.自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思いますか？	3.54±1.03
5.自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある	4.52±0.99
6.自然災害が起きた時、約束事を決めておく家族は安全である	4.29±1.02
7.自然災害が起きた時、家族は安全に避難できる	3.63±1.01
8.学習内容を家族に伝える	4.07±1.18
9.自然災害の被害を減らすため自分にできることはあるか	3.55±1.37
10.クラスの仲間と防災学修を継続したい	4.25±0.93

表3 性格特性と防災意識との相関関係

	1.自然災害は怖いと思いますか？	2.自然災害が起こった時に自分は怪我をするかもしれない	3.住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域である	4.自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思いますか？	5.自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある
協調性	.137	.109	.013	.058	.131
統制性	.416**	.213*	.292**	.196*	.339**
情緒性	.007	.027	-.067	-.206*	.009
開放性	-.205*	-.490	-.057	-.560	-.124
外向性	-.127	.006	-.002	-.204*	-.196*
	6.自然災害が起きた時、約束事を決めておく家族は安全である	7.自然災害が起きた時、家族は安全に避難できる	8.学習内容を家族に伝える	9.自然災害の被害を減らすため自分にできることはあるか	10.クラスの仲間と防災学修を継続したい
協調性	.328**	.158	.237**	.109	.210*
統制性	.188*	.116	.395**	.300*	.265**
情緒性	-.180*	-.152	-.153	-.081	-.230*
開放性	-.168	-.066	-.157	-.145	-.097
外向性	-.201*	-.190*	-.247**	.030	-.206*

*p<0.05 **p<0.01

表4 防災意識に影響を及ぼす性格特性との関係性

防災意識の各質問項目				有意確率 p
	B (偏回帰係数)	95%CI	β (標準化偏回帰係数)	
1.自然災害は怖いと思いますか？				.000***
統制性	0.123	[0.078,0.169]	0.451	
2.自然災害が起こった時に自分は怪我をするかもしれない				.026
統制性	0.068	[0.008,0.127]	0.206	
3.住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域である				.001
統制性	0.105	[0.042,0.168]	0.298	
4.自然災害が起きた時には自分は安全に避難できると思いますか？				.029
外向性	-0.054	[-0.120,-0.006]	-0.204	
5.自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある				.000***
統制性	0.1	[0.047,0.153]	0.329	
6.自然災害が起きた時、約束事を決めておく家族は安全である				.000***
協調性	0.088	[0.040,0.136]	0.322	
7.自然災害が起きた時、家族は安全に避難できる				.041
外向性	-0.049	[-0.096,-0.002]	-0.19	
8.学習内容を家族に伝える				.000***
統制性	0.137	[0.076,0.197]	0.385	
9.自然災害の被害を減らすため自分にできることはあるか				.001
統制性	0.128	[0.053,0.204]	0.304	
10.クラスの仲間と防災学修を継続したい				.008
統制性	0.071	[0.019,0.123]	0.246	

*** $p < .001$

VI 考察

本研究の目的は小学生の性格特性と防災意識との関連を明らかにすることであった。得られた結果をもとに、性格特性と防災意識のそれぞれの対象者の側面の特徴と、性格特性と防災意識の関連性について考察を述べる。

1. 性格特性の特徴について

調査した性格特性5因子の中で協調性と統制性は、

基準の平均値よりも得点が高かった。一方で、情緒性と外向性が基準の平均値よりも得点が低かった。同じ5・6年生を対象とした林原¹⁹⁾による調査結果と比較しても本対象者の協調性と統制性は高かった。対象となった児童たちは、他者への思いやりや周りに迷惑をかけないように心がけ、目的や意志を持って物事をやり抜く責任感が強い傾向がある一方で、ネガティブな出来事に反応し、他者との積極的な交流が苦手な集団

であったと推察される。対象となった小学校は、入学試験があり9年間の一貫教育を実施している。A県内の様々な地域から入学しており、学力水準も高く、目的意識が高い児童が比較的多い学校である。そのため目的や意志を持ってやり抜く統制性が高かったと考えられる。また教育目標の中に集団の一員として責任と自覚を持って行動できる子どもを育てることを目標とされているため、協調性が高い集団であったと推察される。

学童期は学業や遊びを通じて他者との距離の取り方などの対人関係や対人感情、そして明確な自己意識を発達させる。エリクソンは学童期の特徴を「学ぶ存在である」と表現している²⁰⁾。健康な発達をしている子どもであれば、様々な好奇心を有し、やってみたい、知りたい、そして学びたいという思いが湧き上がる時期である。その思い沿って上手に知識や技能を与えることで自らそれを伸ばそうとする気持ちも同時に芽生える。自分が勤しむことで成果も上がり、実感できれば大きな喜びにつながる。周りからの称賛を糧にさらに勤勉性を養うことが可能である。小学校高学年になると、自分のことを客観的に捉えることが可能となり、相対評価を行い自尊感情や劣等感を感じやすい時期である²¹⁾。集団としての性格特性と、発達課題からの児童の特徴の双方の視点から、教育内容と教育手段を検討していくことが重要である。対象となった児童達は、集団として協調性と統制性が高いため、周囲の教員や大人からの適切な知識の提供があれば自ら学び、よりよく問題解決ができると推察される。

2. 防災意識の特徴について

10項目のうち最も平均得点が低かった防災意識は、「住んでいる地域は、自然災害がいつでもやってくる地域である」であった。つまり対象となった児童は、居住地域に災害が来ないと認識している人が、一定数いる現状が明らかとなった。これらの背景にはいくつか理由が考えられる。1点は被災経験の有無である。現在まで自分自身が被災経験を体験しなければ、日々災害について報道がなされている現状でも、自分事として災害を捉えるのは難しいと考える。2点目は保護者の認識も影響しているのではないかと推察される。A県は75年ほど前にマグニチュード7.1の地震

が発生した地域であるが、当時を経験した住民は少なく、保護者世代であっても被災経験をした人は少ないと想定される。地震以外の自然災害はその後も発生しているが、災害に対する危機感が経時的な変化で希薄になった可能性がある。そのような保護者の災害に対する認識が、対象となった児童へ影響していると考えられる。

矢守は、「人は容易に過去の出来事を忘却し、それを風化させてしまう」と述べている²²⁾。そのため行政等は、定期的に地区や地域単位、学校でも避難訓練等の実施を指示している。小学校での防災訓練（避難訓練）は、各市町村の指導により取り組み回数などが決定している。その法的根拠は消防法第36条であり、大規模建築物などに関しては防災管理業務の実施が義務付けられている²³⁾。また平成29年告示の小学校学習指導要領では防災に関する記述がされている。3・4年生の社会で地域社会における災害及び事故から人々の安全を守る工夫、6年生の理科で土地のでき方の中で地震を取り上げている。5・6年生の体育では、怪我をした人への簡単な応急手当の方法を教育している²⁴⁾。しかし、一般的に防災教育については、避難訓練をやった程度との認識を持つ人が多数を占めているのが現状である。もちろん各家庭や地域、学校単位で熱心に防災教育に取り組んでいるところもある。だが国語や算数などの他の科目と比較すると明らかに上げられる時間は少ない。元吉²⁵⁾は、防災教育に対する教員の認識の調査の中で、小学校では比較的に防災教育が熱心に行われているが、「災害時要援護者」、「災害時における民生委員や自主防災組織の役割」など、防災における地域コミュニティに対する理解が十分でないと報告している。防災教育の究極の目的は、自分の命は自分で守ることを理解し実践できるようにすることである。教員は発災時の学校内での対応だけを考えるのではなく、普段の地域生活の中で児童の自助向上だけでなく、共助の視点で身を守る行動を実践できるように、各地域の特性に応じた教育を検討していくことが大切である。

10項目のうち最も平均点が高かった防災意識は、「自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある」であった。5・6年生であっても災害における事前の準備の重要性を理解しており、実

際に約束事を決めていた家庭もあったのではないかと推察される。発災時は、想定外のことが起きる可能性もあり、確認していた約束事が実行できない場合もある。災害の種類や状況によっても想定される被害が異なってくる。児童には家族との約束事を決めることの重要性和、具体的にその約束事が様々な災害が発生したときに実施可能か否かも含め、より実現可能な内容を検討できるような支援が重要である。また「学習内容を家族に伝える」項目も平均点が4点台である。教育を受けた児童を通じて周りの家族の認識も高められるような防災教育も大切である。保田ら¹⁸⁾は、小学生への防災教育の家庭への波及効果について弱いものの相関関係が認められたと報告している。また災害に対する恐怖心をコントロールし、減災に対する自己効力感を高められる教育を継続的に実施することの重要性についても述べている。児童には子どもでも防災や減災に対する備えや行動を一緒に考え、防災教育を楽しみながら受けることができる環境を整えることも重要である。

3. 性格特性と防災意識との関係性について

性格特性5因子の各因子が防災意識にどう影響を及ぼしているのか、因子毎に分析を深めていく。協調性の特性が強い児童は、3項目の防災意識と相関関係が認められたが、主に自分以外の他者との関わりが影響する項目との相関であった。また「6. 自然災害が起きた時、約束事を決めておく和家人は安全である」の防災意識の影響要因 ($\beta=0.322$, $p=.000$) であった。協調性は、人の気持ちに寄り添い、周りの人を大切にしながら協力して成し遂げることが得意であるため、発達課題の観点からも育成していく必要がある。しかし災害時は、周りの意見や他者を優先し自分自身を危険に晒す可能性もある。また周囲をよく観察できる傾向もあるため、同調性バイアスに陥るリスクも孕む。森下ら²⁶⁾は、小学生とその養育者との関係性の中で、信頼関係を前提に自己主張を促す声かけを受けた児童は、少ない児童よりも自己制御力(自己主張力も含む)が高いと述べている。協調性の傾向が強い児童には、自分の考えや行動の意味を自分以外の他者に伝える意義や重要性を継続的に伝えていくことが必要である。

統制性の特性が強い児童は、防災意識10項目中9項目で相関関係が認められた。重回帰分析でも7項目で防災意識の影響要因となっていた。統制性は性格特性5因子の中で最も防災意識に影響を与える特性であることが示された。統制性は目的を達成するための責任感が強い傾向があるため、適切な情報提供を行えば、自ら課題に対して答えを見出す行動がとれると推察される。しかし一方的な情報提供の教育だけでは、主体性が育まれない可能性もある。防災教育をする上では、知的好奇心を煽る仕掛けや学習方法を複数用意して児童が選択でき、かつ何度もリフレクションできる教育環境を整えてあげると統制性の特徴を最大限引き出した教育効果が得られると考える。

情緒性の特性が強い児童は、3項目の防災意識と負の相関関係が認められた。災害が発生したときに自分や家族は安全に避難できないと認識している特徴がみられた。情緒性の特徴は身の回りの環境やストレスなどの外部刺激に対する敏感さであり、情緒性の高い児童は危険に対して敏感で、叱られたり失敗したりすることを恐れると言われている。そのため、災害発生という先のリスクに備える危機管理能力の表れや失敗に対する恐怖からの回答である可能性がある。

開放性の特性が強い児童は、「1. 自然災害は怖いと思いますか？」の防災意識と負の相関関係 ($r=-.205$) があり、災害を怖いと思っていない特徴がみられた。開放性の特徴は好奇心が強く独創的で想像力が豊かと言われている。その反面、目新しくないものや刺激的ではないものには関心が低い傾向にある。毎年同じような防災教室や避難訓練を受け、災害が身近に感じられない状況から災害自体に関心を示していない可能性も考えられる。教員は災害を自分事として捉えられるよう工夫した防災教育の提供と、児童の独創性の特徴を生かした防災への新しいアプローチを実践できる支援を行う。

外向性の特性が強い児童は、6項目の防災意識と負の相関関係が認められた。情緒性の児童と同様に災害が発生したときに自分や家族は安全に避難できないと認識し、かつ学校で学んだ内容を家族と共有しないと感じている。また「4. 自然災害が起きたときには自分は安全に避難できると思いますか？」の防災意識 ($\beta=-0.204$, $p=.029$) の影響要因であった。外向性の特徴は、

社交性が強く積極的で話好きな特徴がある。学校教育の中では、集団教育が基本となる。アクティブラーニングの中でリーダーシップの役割を与えながら、他者の意見を汲み取る役割を与えることで児童自身が学びを深めると考える。

性格特性は防災意識に影響を与えることが示された。統制性の特性が高い児童は防災意識が高く、外向性の特性が高いほど防災意識が低いことが示されたように、これからの防災教育は集団に対し画一的な内容の教育を行うのではなく、性格特性に応じた内容の教育を行うことが必要である。今後の課題として、小学低学年の児童や中学生を対象に同様の結果が得られるのかを検証した上で、性格特性の差が防災教育の学習効果にどのように影響を与えるのか詳細な分析が必要である。性格特性を活かし、個人の強みを活用しながら、より広範な防災に対する風土を醸成することが重要である。

VII. 結語

本研究の目的は、小学生の性格特性と防災意識との関連を明らかにすることである。その結果、以下の内容が明らかとなった。

1. 児童の性格特性は、協調性と統制性の2項目が基準の平均値よりも得点が高く、他者への思いやりや周りに迷惑をかけないように心がけ、目的や意志を持って物事をやり抜く責任感が強い集団であった。
2. 児童の防災意識は、「自然災害が起きた時のために、家族で約束事を決めておく必要がある」や「自然災害は怖いと思いますか？」の項目の得点が高かった。
3. 性格特性と防災意識との2変数との相関変数で、統制性が防災意識10項目のうち、9項目で有意な正の相関関係と、重回帰分析の結果、防災意識7項目の影響要因であった。
4. 統制性は性格特性5因子の中で最も防災意識に影響を与える特性であることが示された。防災意識に負の影響を与える性格特性も示されたため、今後は性格特性の差が防災教育の学習効果にどのように影響を与えるのか詳細な分析が必要であり、個人の強みを活用しながら、より広範な防災に対する風土を醸成していくことが重要である。

文献

- 1) 中野晋, 湯浅成昭, 粕淵善郎. 教育機関の被災と防災管理のあり方. 土木学会論文集. 68 (2) : 118-123, 2012.
- 2) 梅村武仁. 学校危機管理マニュアルの活用と避難訓練についての一考察—東日本大震災「釜石の出来事」の現地を訪ねて—. 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要. 12 : 51-63, 2022.
- 3) 法令検索 : <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=333AC000000005・6> (閲覧 : 令和5年9月26日)
- 4) 佐藤寿哲. 災害によってもたらされる子どもへの影響の文献的検討—発達段階ごとにみられる心理的影響—. 日本災害看護学会誌. 16 (2) : 56-65, 2014.
- 5) 大川小学校自己検証委員会 : 大川小学校事故検証報告書 平成26年2月
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/012/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350542_01.ppd (閲覧 : 令和5年9月26日)
- 6) 平成30年7月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループ. 平成30年7月豪雨の概要 平成30年10月 : https://www.bousai.go.jp/fusuihai/suigai_dosyaworking/pdf/dai1kai/siryu2.pdf (閲覧 : 令和5年11月6日)
- 7) 国土交通省. 平成30年7月豪雨災害の概要と被害の特徴
https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/hazard_risk/dai01kai/dai01kai_siryu2-1.pdf (閲覧 : 令和5年11月6日)
- 8) 文部科学省 2020年度学習指導要領 : https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/ (閲覧 : 令和5年9月)

26日)

- 9) 宇田川真之, 三船恒裕, 磯打千雅子, ほか. 平常時の避難行動意図の規定要因について. 日本災害情報学会誌. 15 (1) : 53-63, 2017.
- 10) 村上一真. 環境配慮行動の規定要因に関する構造分析. 環境情報科学論文集. 22 : 339-344, 2008.
- 11) 竹ノ内耀大, 山口行一, 岩崎義一. 住民の性格が避難意識に与える影響分析. 日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集. 14 : 117-120, 2016.
- 12) Moeka Harada, Nobuyo Tsuboyama-Kasaoka, Jun Oka, et al. Association between personality traits and food stockpiling for disaster. PLoS ONE. 16(12) : 1-11, 2021.
- 13) 肥田知里, 石田靖彦. 級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特-小学生と中学生の比較-. 愛知教育大学臨床総合センター紀要. (8) : 18-25, 2019.
- 14) 文部科学省. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題. 子どもの徳育に関する懇談会 [https 資料 : https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm) (閲覧 : 令和5年11月7日)
- 15) 荒川歩, 原島雅之. 人はいつ「性格」概念を使うのか-ブログにおける「性格」への言及の分類. 日本パーソナリティ心理学会. 19 (1) : 1-14, 2010.
- 16) 納谷和誠, 関口公平, 甲村朋子, ほか. 巨大地震想定地域における住民の防災意識・防災行動の影響要因と平時における災害への備えの質的分析 公開講座参加者の Focus Group Interview. 日本災害看護学会誌 24. (3) : 22-35, 2023.
- 17) 曾我祥子. 小学生用5因子性格検査(FFPC)の標準化. The Japanese Journal of Psychology. 70 (4) : 346-351, 1999.
- 18) 保田真里, 齋藤玲, 邑本俊亮. 小学生を対象とする防災教育の効果の持続性と家庭への波及 沿岸部と内陸部の比較. 自然災害科学. 40 特別号 : 125-142, 2021.
- 19) 林原慎. 小学校「総合的な学習の時間」の達成感に影響を及ぼす要因. 日本教育工学会論文誌. 44 (1) : 127-134, 2020.
- 20) 服部祥子. 生涯人間発達論. 第3版. 医学書院. 東京, 2020
- 21) 文部科学省 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題: https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm (閲覧日 : 令和5年9月28日)
- 22) 矢守克也. 災害の「風化」に関する基礎的研究(Ⅱ) -マスメディアの報道量とマクロ行動変数による測定と表現-. The Japanese Journal of Experimental. 42 (1) : 66-82, 2002.
- 23) 法令検索 : <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=323AC1000000186> (閲覧 : 令和5年9月29日)
- 24) 文部科学省 学習指導要領における防災に関する記述(小中学校) : https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kaihatu/006/shiryo/attach/1375029.htm 閲覧日 : 令和5年9月29日)
- 25) 元吉忠寛. 防災教育に対する教師の知識と態度. 関西大学社会安全学研究. (5) : 1-13, 2015.
- 26) 森下正康, 藤村あずさ. 小学生の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響. 京都女子大学発達教育学部記要. 9 : 125-134, 2013.